



「まつかぜ」の命名は、初代学園長村島帰之先生の著書「松風のひとりごと」に因みます。

村島帰之校長の思い出

2回生 千葉武(1950中卒)

戦後の弾薬集積所の辻堂小学校から平和学園に入学したのは昭和22年4月、第2回生としてであった。我々の一年上までは女子高であったようなので、数十人の女子が集まっていたと思う。入学してビックリしたのは、平塚に住んでいた当時通っていた幼稚園の先生、大橋牧師が英語教師としていらした事である。また平塚ではす向かいの家の同年の女の子の一人が同じクラスにいた事である。

村島先生との初めてお会いした時の様子はもう既に記憶から消えてしまっているが、学校では第二の父の様な存在の村島先生に全クラスの皆で甘えていた思い出がある。当時村島先生は横浜線の小机に住んでいらしたと思う。しかも駅からはそんなに遠くないところにお住まいであった記憶がある。というのは、我々のクラスには30名くらいの生徒たちがいたが、その中の5・6名はお正月になると、その小机のお家にお伺したものである。小生もそのうちの一人であり、多分3回はお伺した記憶がまだ残っている。毎回奥様がいろいろなお料理を準備しておいて下さり、我々男女5・6名は食べ盛りであり、そのお料理を美味しく頂いた記憶がある。また先生のお嬢さんの真理子さんは未だ大学生で、我々を良くお世話をしてくださったことも記憶に残る所である。

村島先生と我々は、休み時間になると噴水池の辺りで日向ぼっこをしながら、先生とお話をしたり、先生のお話を聞きしたりした思い出が残る。

現在のアセイア学校の教会堂などがある敷地は大変な松林の県有地であったが、その土地を取得したとの報をお聞きしたのも村島先生からのお口からであった。

さあ、その先が大変であった。校庭として開墾をしなければならなかったのは当然である。当時は朝鮮戦争の始まる前であり、1949年の夏であったと思う。

我々はスコップなどで松の根っこを掘ったりしていながら、海岸に演習に来ていた米軍がそれを見て援助を申し出してくれ、横須賀から大型機械を持ち込んで、一気に開墾してくれたのは感謝に堪えぬ事である。

然し乍らその連隊の人たちも朝鮮の前線で参戦したものと思はれ、それを考えると大きな悲しみである。

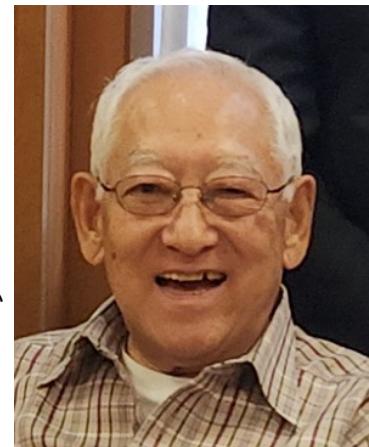
今回、6月2日に機会を得て11回生の人たちに誘われ、初めて村島先生の墓参をさせて頂いた。先生の居られるところは、丁度丘の頂上の様な所で、遠くに海も見渡せ、先生のお喜びのかすれ声が聞こえてくるようなところであったが、多少の草むしりをせねばならぬ状態であったため、同行の11回生3名のご努力によって周りを綺麗に整理され、目を細めた先生の笑顔が見られたような瞬間であった。

昭和32年に大学卒業、就職し、その会社の扱う輸入コーヒー豆をもって、学校近くに越していらした先生のお宅に、嘗てのクラスメート数人とお伺いし、そのコーヒー豆をフライパンで焙煎し、シリコギで一生懸命こすり、粉にして、いれたコーヒーは残念ながら、飲める代物には出来上がらなかったことも遠い記憶に残る。

現在我が手元には先生にもお入り頂いた数葉の写真が残りますが、これらの写真を見て、少なくも昭和32年の初夏には先生もお変わりなく過ごされていたご様子を伺い知ることが出来ます。

小生は残念ながら昭和32年を最後に、今回鎌倉霊園を訪れるまでの間は、先生にお逢いする機会が皆無でした。

ここに村島帰之先生の神の御もとで永遠の平和な時間をお過ごしになることを祈願するものであります。



『パンづくりに魅せられて』

小学校校長 小林直樹

4月から小学校の校長となった小林直樹です。今回は自己紹介をさせていただきます。

平和学園の中高に着任したのは1996年4月。今年で30年目になります。



大学院卒業後は島根県にある全寮制のキリスト教学校に8年勤務していました。家庭の事情で神奈川県に戻ることになり勤務先を探していました。そうしたところ、当時の夏村校長から「パソコンを教えられるなら仕事がある」とお話をいただき、「はい、教えられます」と自分の能力を少々誇張してお返事をしたのが平和学園との出会いです。

入職後はご恩を返そうと、授業ではパソコン、理科、数学を担当、部活動ではバレーボール、サッカー、野球、バスケットボール、バドミントンと運動部の顧問を継続して担当、「なんでもはいと言って仕事をしなさい」という先輩のアドバイスを受けて、いろいろなことに取り組みました。平和祭で幅8m高さ4.5mもある巨大な正門ゲートも生徒と一緒に作ったのも思い出です。

キャリアの後半は広報募集が主な仕事で、昨年度までの2年間は中高の校長として勤めました。そして昨年度末、小学校の校長をとの要請があり「はい」と返事をして赴任しました。

周りの方から見た私の印象は、若いころは運動好き、中堅のころはDIY担当(先生も生徒もドライバーや接着剤を求めてよく私のところに来ました)、そして歌う先生だったのではないかと思います。なぜ歌う先生かというと、礼拝でよく賛美歌を歌って紹介していたからです。校長になってからは「歌う校長」と自称して、平和祭でもステージに立ち、小学校でも入学式から歌っていました。

こんな私ですが、実はもう一つ趣味があります。それはパンとピザを焼くことです。もう10年になります。

はじめのうちは内緒にしていたのですが、いつの間にかあちこちで自慢するようになり、最近では焼いたパンを先生方や事務の皆さんに差し上げて(押し付けて)います。

私が焼くのはカンパニーニュといちじくクリミカンパニーニュ。庭の手作り石窯で焼いています。一度に焼くのは40~60個。あまりに大量に焼くので、YouTubeやインスタにアップするとパン屋さんですか?などのコメントが届くほどです。ちなみにユーチューブは「耐火煉瓦を積んだだけ」と検索いただけすると見つけられます。

石窯はもともとはピザを焼くために作ったもので、時々自分の仲間や学校の皆さんをお招きしてのピザ会をやっています。広報募集を担当していた時は、一緒に説明会の企画をした他校の先生や塾の先生方も我が家にやってきてピザを楽しんでいただきました。

私にとってパンやピザは作ることが楽しく、おいしいと言ってもらえて嬉しい最高の息抜きです。その上パンやピザ、手作り石窯を自慢すると小林を一発で覚えてもらえる。そして人とのつながりが増えるというメリットがあります。今回パンやピザのことを書いているのも、小学校で自慢しているところを聞きつけた松風の編集の方から「パンで書いてくれません?」とリクエストをいただいたからです。



小学校の校長になり、小学校の先生方や幼稚園の先生方にも自己紹介代わりに差し上げました。PTA役員の会合でもパンを焼いて持って行って試食していただいたためか、それを聞きつけた6年生が夏のクラスの宿泊イベントの朝食用にパンを焼いてくれませんかと嬉しいリクエストをくれました。大喜びで、お手伝いの保護者の方にも差し上げようと大量に焼いて持っていました。写真はパンを前にした私と子どもたち、担任の先生と、焼きあがった様子です。

『校長就任にあたってわが師を想う』

中学高等学校校長 高野昇一

今年度から校長になりました高野昇一と申します。校長就任際して、私自身の事について少しお話ししたいと思います。

私は1961年に東京都世田谷区で生まれました。路線でいうと今ではお洒落な街として紹介されることも多い東急線自由が丘の隣駅である九品仏という駅近くになります。

その後。奥沢という所に移り奥沢教会幼稚園に通うことになります。そこで私の心にキリストの種まかれたのだろうと思います。更に、父の勤務先の社宅を転々として横浜市青葉区に、父が一念発起して家を建て、私は高校までその家で過ごすことになります。

キリストの種は芽を出さないまま、私は思うような進路に進むことができず、失意をリセットする目的で、出身中学からは誰も進学することのなかった今の湘南工科大学附属高校に進みました。その時の湘南工科高校は男女共学となった年で、女子生徒は十数名しかいなかったと記憶しています。

そして湘南工科高校には、後に平和学園小学校の校長先生になる荒井巖先生が副校長として在職していました。今考えると運命のめぐりあわせか、私の理科の教科担当でもあったのです。

荒井先生は職員室のご自分の机の上に堂々と聖書をどんと置かれ、授業にも時々聖書を抱えて現れました。平和学園では当たり前のことですが、当時の一般的な学校では宗教をタブー視する向きもあり、私にも荒井先生のそいつた態度は印象的な記憶として残っています。授業の中でも時々ギリシャ語も教えてくださいました。私の心の中のキリストの種が少し刺激されることになった時期でもあったでしょう。

最寄り駅である辻堂駅は毎朝、平和学園高校の茶色いモダンな制服の女子生徒が湘南工科高校の生徒と同数程度いて、駅はごった返していました。

しかし、平和学園がどこにあるかまでわからず、茅ヶ崎市との境の林の中にある神秘的な学校というイメージでした。何やら札拌というものをやっているら



しいという話も聞いて、益々神秘的なイメージが膨らみました。

その後、私は高校を卒業し都内の大学へ進学し、母校の湘南工科高校に教員として再び戻ってきました。国語科教員ということではありました、実際は高校時代自分たちで立ち上げたラグビー部の強化に向けて指導する部活顧問としての役割に重点が置かれた採用でした。

そして荒井先生とも再会を果たしました。

先生は私が教員になったことをとても喜んでくださいました。以前から、出来の悪い猛者たちも先生の前に出るとおとなしくなってしまう不思議な雰囲気がある人でした。怒ったことも見たことがなく、大きな優しさで包み込む人でした。雰囲気で猛者たちを制圧してしまう存在感はそのままでした。

荒井先生は定年退職後、校長として平和学園小学校に移られました。私もラグビー部をある程度強化できたころ、荒井先生から「小学生にラグビーを教えてくれないか」と電話を頂きました。興味はありましたが、その依頼を果たせないまま時が過ぎてしまいました。

2011年東日本に大きな災害があり、私の心の中のキリストの種は大きく芽吹き、翌年に受洗しました。更にその翌年、私はアセシア湘南中学高等学校に入職しました。すでに荒井先生は天に召されしまい、お会いすることができませんでした。

その後一旦、平和学園を離れましたが、また昨年度学園に戻り、今年度から校長となりました。わが恩師、荒井巖先生のような大きな愛の人となれるよう御心に従い学園に仕えていきたいと思います。

村島先生遺稿が平和学園へ

村島帰之先生が遺された多数の原稿や写真が孫の村島帰一氏より平和学園に寄贈された。

村島先生は大正から昭和にかけて大阪毎日新聞記者として労働、貧困等の社会問題を取り材し、賀川豊彦先生の「死線を越えて」の出版に道を開き、戦争中に白十字会林間学校の理事となって、戦後平和学園を創設した。

寄贈された原稿や写真は段ボール14箱分で、平和学園では今後総目録を作成し、展示を目指したいとしている。

(毎日新聞2025年4月25日付朝刊神奈川版既報)

『医師としてスタートラインに立って』

吉武杏奈(2018高卒)

この度、臨床研修医として活躍されている吉武さんからお便りを頂きました。在学中にお父様を病気で亡くし、周囲にも支えられ医師を志されました。

私は現在、山口大学医学部を卒業後、山口県周南市にある徳山中央病院にて初期臨床研修医1年目として勤務しております。日々の診療に追われるなかで、高校時代の学びや出会いが今の自分を形づくっていることを、改めて強く実感しています。



アセシア湘南高校での三年間は、学業の面はもちろん、人間的な成長を支えてくれたかけがえのない時間でした。少人数でアットホームな環境の中、先生方との距離が近く、勉強や進路で行き詰ったときは、気軽に相談できたことをよく覚えています。真摯に向き合ってくださる先生方の姿勢は、後に医師を志す決意を固めるうえで大きな支えとなりました。また、同級生とのつながりから学んだ互いを尊重する姿勢は、今でも仕事や人間関係の基盤になっています。

特に印象に残っているのは、毎年の「平和祭」です。クラス毎の出店準備では、細かい作業や意見の食い違いに直面することも多々ありました。しかしクラス全員で役割を分担し、先生方にも支えていただきながら一つのものを作り上げていく過程は、協力の大切さとやり遂げた時の喜びを強く感じさせてくれました。仲間と力を合わせて形にする経験は、医療現場でチームとして働く今の自分に直結していると感じます。病棟や救急の現場では、医師だけでなく看護師、検査技師、薬剤師、理学療法士など多くのスタッフと協力しなければ患者さんに最善の医療を届けられません。高校時代に体験した「一緒に作り上げる」姿勢は、確かに今の自分を支える大切な土台になっています。

山口大学医学部での学生生活は、専門知識を学ぶ喜びと同時に、医療の奥深さや厳しさを実感する日々でした。特に臨床実習では、患者さんに直接向き合う経験を通じて、医学とは単なる学問にとどまらず、人ととの信頼関係に支えられていることを学びました。この姿勢は、アセシア湘南高校で大切にされていた「個人を尊重する」という校風と重なり、今なお私の根幹に息づいています。

徳山中央病院は山口県東部の基幹病院であり、救急医療から高度専門医療まで幅広く担っています。研修医として救急外来で初期対応にあたる日もあれば、手術室で執刀医の補助を務めることもあり、時には自ら手技を任せられることもあります。知識や技術の不足を痛感し落ち込むこともありますが、その一方で、患者さんに向き合いながら成長していく実感を得られる毎日は充実感にあふれています。

また、ありがたいことに今でも当時の担任の先生方とは交流が続いている、帰省した折にお会いすると、学生時代と変わらない雰囲気で楽しく会話をしたり、一緒に食事に行ったりしています。医師として社会に出た今でも、変わらず温かく接してくださる先生方の存在は、大きな励みとなっています。



こうして振り返ると、高校時代に培った「人と協力し合い、一つの目標に向かう力」と「人のつながりを大切にする姿勢」が今の自分を大きく支えていると改めて思います。小さなコミュニティだからこそ育まれる温かな人間関係や、先生方の献身的な指導は、社会に出た今こそ一層そのありがたみを実感します。アセシア湘南高校で過ごした時間は、私にとってまさに原点であり、これからも搖るがね支えとなるでしょう。

医師としては駆け出しだけですが、日々の経験を糧にし、信頼される医師へと成長していくよう努力を重ねてまいります。そしてこれからも、母校で得た学びや出会いを胸に、自分の歩みを進めてまいります。

『ファーマーズ・テーブルたさき』を訪ねて

田崎裕敬(1984小卒)

あつあつでサクッとした衣を噛むと、身が大きく思わず感動のエビフライ！ 野菜を中心としたお惣菜をサイドに玄米ご飯。フライなのに胃に優しく、とてもヘルシーにご馳走になりました！

雄三通りから鉄砲道を平和学園の方へ80m程歩いた左手に、花と緑に覆われたレストラン、“ファーマーズ・テーブルたさき”があります。今回は“たさき”のオーナー田崎裕敬さん(1984年小卒)にお話をうかがってきました。



小学校の時、樋岡先生に「これからは男子も家事ができなくてはいけない。」と言われ、調理や上履き洗いを習いました。その時初めて、「男が料理しているんだ」と気づかされ、家でも料理をするようになりました。校庭で稻作もやって、食に対する興味を養わされました。大学では法学部に入りましたが、授業よりアルバイトの飲食店の仕事が面白くて、自分は法律より調理を含めた物づくりが好きだとつくづく思ったそうです。

お母さまがパンや惣菜のお店をしていたこともあり、1999年に自宅を建て替えて、“ファーマーズ・テーブルたさき”を開店し、家族の協力で営業することになりました。

玄米ご飯、さまざまな野菜料理、大きな具の入ったお味噌汁、メインの多彩な揚げ物、飲み物がセットや単品、またテイクアウトでも味わえます。夕方はテイクアウトのみですが、新型コロナ禍の時期は以前からテイクアウトをしていたので、補助金を受けずに乗り切れたとのことです。



田崎家では長男の裕敬さん、弟の雅治さん(1985小卒)、妹の未央さん(1994小・1997中卒・2000高卒)が平和学園に通い、お母様はPTAとしてもあしき20年学園とお付き合いがありました。並行して校内の売店を任せていたので、生徒とも顔なじみになって、今でもたさきを訪れる卒業生や先生は少なくありません。

この店で年齢層の広い新たな人間関係もできます。様々なエピソードを多くの教え子に残し、故郷の巻機山から戻らなかつた横山先生を偲んで、増渕先生や数人の卒業生とで巻機山に登ったのも、“たさき”でできた交友関係からです。



「平和学園では固定観念にこだわらず、自由に生きることを教えられました。人とのつながりを大切に、また、女性の生き方が多様になり、惣菜や弁当の需要が増えていく中、“たさき”的な方に自信をもつてこれからもやっていきたい。」という力強い意志をうかがいました。

ファーマーズ・テーブルたさき
茅ヶ崎市東海岸北2丁目4-46 田崎ビル 1F



平和学園が私に授けてくれたもの

中西裕二(1957小卒)

私が入学したのは1951年かな。平和学園小学校ができたばかりだったようです。バス等の交通機関はなく自転車で通学です。舗装されていない土の道で、周囲は畑か松林。子供にとっては、戦後のどかな世の中でした。卒業と同時に茅ヶ崎から東京に移ってしまったので、私の記憶する平和学園はその当時のままです。



1952年の様子

あの頃の平和学園は、起伏のある砂地に新しくできた木造平屋の教室などが点在し、なでしこの花がところどころに咲き、松の木も多く見られ、教室等は渡り廊下でつながっていました。教室にはなぜか地窓があり、先生が黒板に向っていて背を向けているときにそこから脱出してしまう生徒もいて、そこにあったのは限りない自由であったのかもしれません(自由といつても、決して身勝手なことはしませんという、神様との約束があったのでしょうか)。

他者を、そして生き物をいつくしみ、愛するように育てられていたように、今になって思います。規律のようなものは全く感じられませんでした(しかれることはありました)。

そして僕は当時の校歌が大好きです。メロディもいいのですが、歌詞はよくある学校礼賛でなく、そこに学ぶ生徒がすこやかに育つよう歌っていたからです。礼拝は讃美歌をうたい、お祈り、そして聖書講話がありました。これがまるで講談のように面白く、毎回楽しみでした。覚えているのは、ダビデがゴリアテを石つぶてで倒した話ぐらいですが。

村島園長とはあまりお会いすることはありませんでしたが、僕には人生を変えた大きな恩があります。

4年生か5年生の時、園長先生から父に話があり、

横浜国大に合格した優秀な学生がいるのだが、母一人、子一人で学費が払えない、ついては家庭教師をすることで応援してほしいと。当時、我家は家業の婦人服仕立業(洋服屋)がアメリカさんで大繁盛しており、かくして僕に優秀な家庭教師がつくことになりました。

すると僕はめきめき勉強ができるようになり、難関中学に合格してしまったのです。その報告で村島園長をその病床にたずねた時、そうか、そうかと話を聞いて下さり、その時の優しい笑顔が今でも目にうかびます。



平和学園で過ごした日々で(あえて教育とは言わない)知らず知らずのうちに他者のことも考える心がはぐくまれたようです。今、僕は苦難に直面している人々を救う活動をしている4つの団体に少しだけど寄付をしています。国境なき医師団、UNHCR、ジャパンハート(ミャンマー、カンボジア等で医療活動をしている)、そして中村哲さんのペシャワール会です。

さて、しかしながら、世界各地では非人道的な戦争や迫害が行われています。

人類は助け合ったり、殺し合ったりする。これは宿命です。助けるために殺さざるを得ない状況があるからです。これは永遠に続くだろう。だから僕は苦難に直面している人々を助ける団体を応援している。命の危険もある苛酷な現場で活動している人たちには頭が下がる。ひ弱な僕にはとても無理だ。

平和学園の通信簿が残っている。体育は2です。おなじで3にしてくれてもよかったですと、今でもよく思っています。

60年ぶりに小学校生活を振り返ってみて 服部(旧姓 栗崎)眞弓(1971小卒)

一昨年、政府公認の「前期高齢者」となった私にとって、半世紀以上前の記憶をたどるのはなかなか大変でしたが、納戸の奥で眠っていた子供時代のアルバムを久しぶりに開く良いきっかけとなりました。

私たち1958/1959年生まれの学年は、1965年4月に平和学園小学校に入学しました。29名の仲間とともに始まった小学校生活は、数名の転入・転出を経て、1971年3月に24名で卒業を迎えました。

平和学園は、自由でのびのびとした環境のもと、キリスト教教育の精神に基づき、上級生が下級生の面倒をみるという温かな習慣が根付いています。兄弟・姉妹と共に在籍する同級生も多く、私も3歳下の弟と通学していました。

弟は同級生の柳生慎悟君のご実家である教会で日曜学校に参加したあと、柳生君や川崎雅哉君と一緒に卓球で遊んでもらっていました。また学校生活では尾高裕子さんにお世話になることが多く、私自身も彼女のお姉様・恵子さんに、社会人になってから仕

事面で助けていただく縁もありました。

学校全体がまるで一つの大家族のよう、毎日が温もりに満ちた心地よい学び舎でした。個性を尊重し助け合いながら過ごした6年間は、かけがえのない時間であり、その後、弟も娘2人を迷わず平和学園に入学させることとなりました。



学校行事は四季を通じて充実しており、数多くの思い出が詰まっています。春には静岡県御殿場市での「自然教室」や乙女峠・金時山への登山が行われ、秋には小学校全体が赤白組に分かれて声援を送った「運動会」が思い出深いです。

また、放課後練習に明け暮れた「鼓笛隊」の演奏発表や、学年単位で準備した「学芸会」なども盛り上がりいました。冬には群馬県田沼市での「スキー教室」など、楽しい行事は数えきれません。



旭日重光章を受章

稻野和利さん(1966小卒)が2024年秋の褒章『旭日重光章』を受章されました。

旭日重光章は国家または公共に対する顕著な功績に対して贈られます。

稻野さんは野村アセットマネジメント株式会社社長や日本証券業協会会長、投資信託協会会長などを歴任。

証券業協会会長としてNISA(少額投資非課税制度)導入に尽力されました。



タウンニュースより転載

平和学園の理事会監事としても長年にわたり学園をサポートして頂いています。

古希同窓会開催報告 1973年高卒

同窓生と70歳を迎えた茅ヶ崎スペインクラブでフランコを見ながらお料理を堪能。素敵な記念日になりました。1年1年が健康で過ごせるように生きていきたいと思います。

(松本あけみ)

級友と何年ぶりかで再会でき本当に楽しい時間を過ごすことができました。

食事もとても美味しかったし、初めて見たフランコダンスも最高でした。

(山本美千代)

久しぶりに皆に会え楽しい時を過ごしました。フランコショーもとても素敵でした。

(高井道子)



2025年6月29日開催

訃報

一昨年、まつかぜに「平和学園小学校の教育」を寄稿してくださった川崎雅司さん(1968小卒)が2025年5月に交通事故により天国へ召されました。心よりお悔やみ申し上げます。

クリスマスチャリティーパイプオルガンコンサート 2025

2025年12月6日(土) 13:30開演 入場無料

久しぶりに莊厳なパイプオルガンの音色を聴きにいらっしゃいませんか？

昨年は12月7日にパイプオルガン山本由香子さん、サクソフォン石田寛和さんによるクリスマスチャリティーコンサートが開催されました。

山本由香子さんによるバッハのカンタータ、石田寛和さんのオリジナル曲、平和学園小学校ハンドベルクラブのクリスマス曲などバラエティーに富んだ曲の数々。

パイプオルガン・サクソフォン・ハンドベルの異色のコラボも実現し、奏者も会場のお客様も心ひとつに楽しいクリスマスを過ごしていただけたのではないかと思います。

今年はオルガン 山本由香子、チェロ 岩瀬うらら、そして小学校ハンドベルクラブでお届けします。ご来場お待ちしております！ 受付で卒業生の旨お伝えください。



2025年は12月6日(土)開催
パイプオルガン 山本由香子
チェロ 岩瀬うらら

小学校バザー2025

2025年11月8日(土)11:30～13:30 開催

小学校PTA主催のバザーに校友会が協力参加します。チョコレートつかみ取りなど楽しい企画も実施。ホームカミングデーにもなります。是非、お出かけください。

また、販売用の寄贈品を集めています。ご協力いただける方は「バザー寄贈品」と明記の上、小学校宛に送ってください。なお、寄贈品は未使用のものに限り、食品はご遠慮ください。

当日の持ち込みも大歓迎です。

＜販売用寄贈品送り先＞

〒253-0031茅ヶ崎市富士見町5-2
平和学園小学校

バザー寄贈品急募！



【バザー来場のお申込み】ホームカミングデー
2025年11月5日(水)までに右のQRコードよりお
申込みください。



維持会費納入のお願い

校友会運営にご協力ありがとうございます。
当会はボランティアで運営されており、会費は会報
まつかぜの発行やWEBページの維持、学園支援
などに使わせて頂いております。
維持会費は同封の振込用紙を利用して納入して
いただきますようお願いいたします。

1口 1,000円 何口でも結構です。

銀行振込は下記より

スルガ銀行 茅ヶ崎支店(普通)503511
平和学園・アセイア湘南校友会

2024年度校友会会計報告

入 の 部		支 出 の 部	
項 目	金額	項 目	金額
入会金	1,470,000	ジャズコンサート	444,044
維持会費	274,000	パイプオルガンコンサート	243,172
寄付金収入	271,736	まつかぜ・学園広報	298,918
事業収入	420,205	支援金	265,000
その他	31,699	卒業記念品	576,840
小 計	2,467,640	その他	66, 506
前期繰越金	6,117,869	小 計	1,894,480
合 計	8,585,509	次期繰越金	6,691,029
		合 計	8,585,509

住所変更等は下記ホームページ
から手続きできます。

平和学園・アセイア湘南校友会への連絡・お問合せ

メールアドレス: heiwagakuen@gmail.com WEB: <https://www.heiwa-gakuen.com>

郵便: 253-0051 茅ヶ崎市富士見町5-2平和学園内 平和学園・アセイア湘南校友会

電話: 0467-87-1662

※校友会・同窓会への連絡がある旨をお話頂ければ、折り返し電話を差し上げます。

